

Title	世話役の世代間伝達に関する心理臨床学的研究(Abstract_要旨)
Author(s)	辻河, 昌登
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.r12907
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（教育学）	氏名	辻河 昌登
論文題目	世話役の世代間伝達に関する心理臨床学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、論者の 25 年余に亘る心理臨床実践経験をもとに、心理療法の目的をクライアントが生きる困難を抱える能力を保持しながらより豊かに生きるという営みに対して、心理臨床学の専門性から関わることと位置づけ、「世話役の世代間伝達」という観点から 3 事例の検討を通して論じ、心理臨床学及び心理臨床事例研究に新たな視座を提示したものである。</p> <p>論文は、自身の心理臨床観を述べて論文を貫くパラダイムである「臨床の知」について解説した序章に始まり、現代家族が抱える夫婦関係及び親子関係の課題を臨床的事実として提起し「世代間伝達」の概念を定義した第 1 章、世代間伝達に関する国内外の心理学、心理臨床学及びその近接領域の先行研究をサーベイし、本論文の目的を明確にした第 2 章と続き、第 3 章から第 5 章は心理臨床事例研究によって構成され、いずれも精神分析的な心理療法の概念を用いて考察がなされている。まず第 3 章では、家族のなかで親の「世話役」を引き受けて生きる成人女性の心理療法事例を提示し、こうした心理的状況にあるクライアントへの関与には三世代間における心理的課題への取り組みが必要であることが論じられている。第 4 章では、摂食障害の壮年女性との心理療法を通して明らかになった世代間伝達の課題について、親の世話役を引き受けると共に子どもの世話役をも引き受けるとした場合のクライアントへの関与には、上の二世帯と下の一世帯を含めた四世代間における心理的課題への取り組みが必要になる可能性が論じられた。続く第 5 章では、身体症状を訴える高齢者女性との心理療法事例を提示して、かかる女性が自身の人生を「子ども」「女性」「嫁」「妻」「母親」「姑」「祖母」といった五世代間における外的・内的自己として生きる在りようにより心理療法において関わる必要性が論じられた。</p> <p>これらの心理臨床事例研究によって明らかになった結果が第 6 章において吟味され、世話役の世代間伝達の観点から、心理療法における心理臨床家の役割が次の 5 点にまとめられた。また、それらは心理臨床学における新たな視座を提供するものと結論づけられた。</p> <p>1. クライアントを世代間関係における限定された役割存在としてではなく、さまざまな役割を内包した「一個の人間存在」として捉え、クライアントの生き方を支える「世話役」として機能すること。</p> <p>2. 心理療法の目標は、クライアントが「世話役としての自己」を抱え検討しながら生きられるようになることであるという視点をもつこと。</p> <p>3. 世代間関係の検討の際には、三世代から五世代間の関係を視野に入れる必要があること。</p> <p>4. 個人が抱える心理的課題は、世代間関係における相互影響的な関わり合いを通して形成されるものであり、上から下の世代へという単一方向性ではなく下から上の世代も含めた「世代間相互伝達」という視座をもつ必要があること。</p> <p>5. スーパーヴィジョンなどを通して、第三者が知的・情緒的な「世話役」を引き受ける機会をもつ必要があること。</p> <p>最後に、今後の課題として、さらに多くの世代にまたがる心理的課題の検討、世代間伝達が望ましい在り方で成されている世代間継承の事例の検討の 2 点が終章において述べられた。</p>			

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、個人の抱える心理的課題を当該個人の病理ないしは心理的位置からではなく世代間関係という位置から捉え、その位置から心理療法の在り方を論じたところに独創的な意義がある。心理臨床学の実践である心理療法においては、通常、主訴を顕在化せしめている個人の精神病理ないしは心理的課題に焦点を当てて、心理療法実践を通して主訴を解消・解決へと導くという方向性をもっている。しかし論者は、個人の精神病理ないしは心理的課題に焦点を当てるときに、生き方や在りようといった個人の人生様式により注目する。そして、世代間関係において個人が担わされる「世話役」という内的自己が個人の人生に与える影響を重要視し、それを心理療法における中核のテーマとして位置づけ、精神分析的な心理療法の概念を用いて心理療法事例を理解しようとしている。

このような論者の考え方の基盤になっているのはその心理臨床観である。世代間関係のなかで個人が抱える関係性の障害や問題は、個人・世代を越えて受け継がれていくという世代間伝達の在りようについてはすでに多くの指摘があるが、論者はそれらの指摘が世代間伝達された未解決の心理的課題を消失・処理・切断させようとする、あるいはそのことが必要・可能だとする従来の指摘に対して、はたしてそれが可能なかと疑問を投げかける。そして、臨床体験を通してその可能性に異を唱え、世代間伝達された未解決の心理的課題を当該個人が抱えて生きていくことができるようになる過程を共にすることこそが心理療法にとって重要であるとする自身の心理臨床観を明確にする。こうした心理臨床観は論者の長年に亘る心理療法体験からもたらされたものであり、それが心理療法において十分に機能していることが3事例によって裏付けられている。とくに、上から下の世代のみならず下から上の世代への方向性を射程に入れた相互性を取り上げ、世代間相互伝達の視点を提示したことはきわめて意義深い。

3事例からは、心理臨床家としての論者のクライアントに向き合う真摯で誠実な姿勢がうかがえ、また上述した心理臨床観に基づいて心理療法が展開する様相を見ることができ、そこから得られた心理臨床家の姿勢として必要な視座の提示も抑制の効いた的確なものである。さらに、こうした世代間関係を射程に入れる心理臨床観は心理臨床学の視野を拡張、他の学問領域への展開可能性を内包している点で今後の発展が期待される。

ただ、こうした心理臨床観はクライアントの主訴や精神病理をどのように心理療法に位置づけ活かしていくのかという点で、検討の余地を残している。また、表面的には問題なく継承されて個人の人生に顕在化せず心理療法の対象とならない世代間継承の場合においても潜在化していると考えられる心理的課題を心理臨床学がいかに探求していくのかという課題も残している。加えて、概念を精緻化して使用する点での若干の甘さも認められる。しかし、これらの点は本論文の価値をいささかも損なうものではなく、本論文の観点からの心理臨床学の創造的発展の可能性として位置づけることができるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては（公表時期未定）、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降